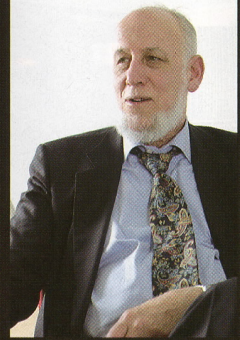


自動車エンジニアリングを学んだ者がオーディオを創るとどうなるのか？ そんな事例はあまり聞いたことがないが、実はひとりだけ存在する。ティム・デ・バラビチーニ。1945年、英国人の両親のもとアフリカはナイジェリアで生を受けたという彼は、20歳で英国のロックバンド用機材のカスタムデザインやスタジオ機器のモディファイなどに着手する傍ら、大学や独学で内燃機関を学んでいたという異色の人物。無論、自動車エンジニアを目指していた時期もあったというが、それでもオーディオ業界では彼独自のノウハウによって作られる商品が高い評価を得ていることから1972年に日本Lux社にヘッドハンティングされて以来、様々な経緯を経て1978年にここで紹介するEAR社を設立。それ以降、強烈なファンをもつに至るほど、独創のオーディオを世に送り出している。

この『EAR V12』は、バラビチーニ渾身の作というだけに、その外観のモチーフになったのは、ジャガーのV型12気筒5.3ℓユニット。彼はジャガーのV12ユニットに対して「上品で優雅、

スムーズで粗野のないシルキーなトルク特性に惹かれた」というだけに、自ら手がけるインテグレートッド真空管アンプにその資質を投影した。「洗練された音の気品」を表現するべく、すべてを白紙状態から設計、瑞々しい音のヒダが空間の奥深くまで澄み渡りつつ、圧倒的な美しさと繊細さをもって、リスナーを包み込むように仕上げたという。しかし、バラビチーニは格言としてこうも語っているのが印象的だ。

「オーディオ装置は独自の音をもってはいけない」
実はこの格言こそ彼が高く評価される理由である。何しろ1993年にはあのグラミー賞にて、ベスト・ワールド・ミュージック・アルバムに輝いたライ・クーダーのアルバム『テクニカル・コントリビューション』を担当したり、1996年の同じくグラミー賞のノミネート作品にもマスタリング・エンジニアとして関わるなど、



今回、特別にインタビューに応じてくれた生粋のエンジニア、ティム・デ・バラビチーニ。奇才などと言われることも多いが、実は苦勞人でもある。常に努力と試行錯誤を繰り返して研究を続けている。この日本にも多くのファンをもち、支持率が高い。

一流アーティストのレコーディング・エンジニアとしても活躍、時にはミュージシャンから直接、建築時からホームスタジオのデザインや機材製作などを依頼されることも少なくないというだけに、その顧客には、ポール・マッカートニーやリンゴ・スター、ピンク・フロイド、エアロスミス、レニー・クラビッツやボブ・マーリーなど蒼々たる名が連なっているから凄い。

そして今の時代、デジタル化が常識となったているが、彼はそれに対しても柔軟に対応。「デジタル化されているとはいえ、アナログの感性和音楽性に拘った音を再現する必要がある」とテーマを掲げ、真空管を用い、それにマッチするための独自のトランスを開発、パラメータの数値をあてにせず、「耳に届く心地よい音」を頼りに回路を導くという。このバランス感覚を大事にし、音と音楽のスイートスポットを探すのだ、と語る。

奇才の真空管オーディオ、その心地よさは、自動車の歴史をも感じさせる世界なのかもしれない。

見た目はV12、 中身は革新。



出力管に間接加熱方式のEL84、5極管を片側6本、計12本を配置。パラレルプッシュプルA級動作として低歪率を達成しているのがポイント。また、フィードバックを使わずに、バラビチーニが拘り続けてきた「バランスブリッジモード」、超広域帯域スペシャルオリジナル出力トランスを使用しているのも特徴だ。その結果、本当の意味でのビュアを実現、官能的なサウンドを聴かせる。

EAR V12

SPECIFICATIONS

- 品名: EAR V12
- 出力: 50W
- パワーバンドワイド: 12Hz-60kHz -3dB (1/2パワー)
- M.D.: <0.5%
- 出力タンピングファクター: 10
- S/N比: 93dB (<0.4mV)
- 入力感度: 400mV
- 入力インピーダンス: 47kΩ
- 消費電力: 200VA
- 重量: 22kg
- サイズ: W420×D440×H135mm
- 使用真空管: 10×ECC83 (12AX7) / 12×EL84 (6BQ5)
- 希望小売価格: 94万2900円 (税別) / 89万8000円

